

# 広島市教育センター所報

No.6

昭和56年2月

広島市教育センター

広島市東区牛田新町一丁目17番1号

〒730 電話 (0822) 23-3563

## 子どもの為になる研修

広島市立袋町小学校長

清見 一 士

ゆとりある授業とは、子ども自身が問題とすることを、納得いくまで追求させ、たしかめさせ、理解させるところにある。そのためには人間尊重の基本にたち、教育観、指導観を確立し、専門職としての研修をつまなければならない。

4月になると、真新しいランドセル姿の登校風景がみられる。1学期も終わりに近づく頃になると、安全を目的につけたランドセルカバーの破損が目立ち始める。

大人が修理して1年間保たせるか、放任しておくか、ゆとりを生かし教育として扱うか教師の教育観でさまる。さらに「カバーを大切にしない」「お母さんに修理してもらってきなさい」と言葉でかたづけられるか、カバーを大切にしようとする子どもの善性に灯をつけ、押しつけないで尊い体験をさせていくかも教師の指導観でさまってくる。

専門職といわれるゆえんも、こんなところにあるのではあるまいか。ベスタロッチは「人が人に対し為し能う最良のことは、その自助を助けることにある」と言っている。この力を教師としては磨かなければならない。

私ごとで恐縮であるが、若い頃の体験を紹介したい。ストーブ談義の場で校長先生から「君たちの仕事は児童の教育をつかさどることだ」と話された。教育をつかさどるとは何か、疑問はふくらむ一方である。幾日か日が暮れてなお討議し、最後には授業を素材に検証までした。明確な結論はでなかったが、これだといったものがまとまったように思う。

動機づけは校長、あとはお互いの自助である。させられたという意識がないので、徹底した論争が続いたのであろう。本来研修は、自らが自主的に取り組むことを基本とするものであり、基本に連動しない共同研修は、依存性が強くなるように思える。

今後、研究の成果をどんな方法で累積していくか、それをどう交流していくか、人間らしく生きたいという子どもの真の願いにこたえる研究内容は何か、各学校の研究態勢を整えて追求していく課題である。もちろん学校が同一目的を目指す教師集団として存在していることが不可欠の条件であり、その集団の真価を問われている時でもある。

## 教師はなぜマンネリになるか

— 研修と工夫について —

広島大学助教授 片岡徳雄

**人気上昇の「教師」職** 教師という職業は最近の不況を反映して、なかなか人気があるようだ。その証拠に、教育学部系の大学への志願者は多いし、教員採用試験もなかなかの難関になった。

しかし、それだけの理由でもない。もともと教師という仕事は、ものすごく派手なことを望まないなら、これほどのんきな、といって悪ければ、手堅い仕事はない。そういう人気は昔からあった。

この人気には、よい意味もあるが、もちろん悪い意味もある。職業として、生き馬の目をひきぬく「生存競争」もなければ、明日に勝負がきまる「せちがらさ」もない。流行を追うことなく「手堅く」「実直に」。こういった考え方が、いつしか、のんびんだらりの教師生活を生むことになる。

他人のことを言うより、私自身のことを反省しよう。このような、のんびんだらりの教師生活は、じつは、研究を職業とする学者にもある。「目下、研究中」という看板をかかげてねむることができる。

**他の職業では** 教師の職業に似ている三種の職業群の、自己成長の力学を探ってみよう。

まず第一群、研究者、スポーツマン、芸術家——。これらは、何によって自らを高めるか。それは、他の誰でもない。自らが自らと戦って、自らを高めていく。喝采を今、得る得ないでなく、精進の道は自らとの戦いである。織田幹雄をみよ。王貞治をみよ。ミレーをみよ。教師にもこの力学は欲しい。

第二群、組織人、つまりサラリーマン、官公庁の役人や会社員たち——。彼らは、何によって自らを高めるか。それは、他人の目である。上司からの目、同僚からの目、部下からの目、

さらには顧客からの目。他の組織からの目。この中で、自分を鍛えてゆかざるをえない。叱られ、批判され、恥をかかされる。その痛手の中から育ってゆく。そういう痛い目にあうまいと、注意する所から出発する。

一般に、大学卒で組織（会社など）に就職して、30歳までに叱られないような人があるだろうか。教師はどうだろう。就職すれば「センセイ」である。センセイとは「叱っても、叱られることなき」人たちのことか。

さて、第三群は専門職、医者、弁護士、技師たち——。彼らの自己研修のヒキ金はなにか。自営業である彼らは、モウケるためには腕を磨かざるをえない。ヤブ医という噂がたったら、もうおしまい。勉強と工夫はメシに直結している。

**最後のトリテ、子どもとともに** こう考えてくると、教師の研修や創意工夫は、なかなか出にくい仕組みになっている。のんびんだらりとなるようになっていく。よほど高潔な人でないと、なまけたくなるのも無理はない。

しかし、最後のトリテを忘れてはならぬ。それは、教師は「成長する子ども」と共にある。子どもが「成長する」のなら、自らも「成長する」工夫と創造と研修がいる。でないと、子どもたちのリーダー（学習集団のリーダー）の座をおりてほしい。子どものすべてのモデルになれ、といっているのではない。そんなことは不可能に近い。せめて、日々、新たな、工夫をこらし、研修する点において子どもに、「学ぶこと」「変ってゆくこと」の大事さを示したいものだ。

「ゆとりと充実」の教育が最も警戒する精神もまた、「学び」「工夫する」ことを忘れた、マンネリズムである。

## 創意と工夫は身近なところから

広島市教育センター次長 溝口二郎

「ゆとりのある充実した学校生活をおくらせたい」という教師の願いは、各学校において、教育専門職である教師の力量として発揮され、具体化されて実践に移されつつある。親と子の、教師に対する期待は大きい。

この期に当たり、次の3点をあげ、今後の指導の参考に供したい。

### 1 「わかった」と喜べる授業に

「わかる授業の創造」という言葉があるが、この言葉は、それぞれの教材が、指導計画全体の中でどこに位置づけられ、今後何とかかわって発展していくかを理解することから始まるものである。1つ1つの教材が生かされるのは授業の場であり、学校での生活時間の大部分が授業時間であることを思えば、教材研究の大切さと授業の重要性に気づかずにはいられない。

1例に小学校4年生理科の「豆電球と乾電池」の教材をとり、授業の進め方について考えてみたい。この教材のように基礎的な実験操作技術を必要とする場合には、グループごとの実験にはいる前に、教師が児童を教師用実験機の周りに集め、次の指示による演示実験を加えてみてはどうであろうか。

① 今から、先生が実験をします。よく見てください。

② では、太郎君、先生と同じ方法で実験をしてください。

こうすれば、その間は、児童が注意力を集中して実験を観察することになるので、後に実施するグループ実験の過程の中でも、「これができる」、「これはわかった」と、心の中で喜びつぶやくことができる児童を、1人でも多くすることができはしまいか。

模索しながら進めるわずかな改善、あるいはちょっとした配慮を日々積み重ねていくことが、

児童が「わかった」と喜ぶ授業を生み出して行くことになるのである。どの教科・どの教材においても、教室に校庭に、あるいは準備室に備えてある教具の、無ければ教具を自作して、活用の方法を研究すれば、さらに1人でも多くの児童・生徒が「わかった」と喜ぶ授業が展開できるはずである。今後、一層教材研究を深めて、1時間1時間の授業の質的向上に努めていきたいものである。

### 2 勤労体験は感謝と奉仕の活動に

教育活動の一環としての勤労体験は、学校によってその方法は異なるが、教師と児童・生徒の協力によって実施に移されつつある。仕事を進める過程の中で、手順の大切さ、完成させるための協力と責任の大切さ等を、児童・生徒自身が体得していくことができるので、人格形成の上で大きな役割を果たすものである。

この勤労体験はもう一步進めて、より多くの人に喜んでもらえる「感謝と奉仕」の場の設定のために、教師が模索してもらいたい。開校記念日でも、運動会当日でも、敬老の日でも、いつでも良い、どこでも良い。児童・生徒の考え及ばないところへの指導、それが子供をより大きく生かす道である。

### 3 教師の向上が児童・生徒の向上に

教育の推進は、まず、教師自身が「自分が態度で示すことから教育を始めよう」の気概を持つことから始まる。

1つ1つの問題の解決に粘り強く取り組み、小さな創造でも、ちょっとした工夫でも、日々の教育実践の中に生かそうと努力する教師、それは教育者として自らの向上に精進する教師である。児童・生徒は、この教師の心に感じ、魅せられて、後姿を見習いつつ、自らを向上させていくものであることを忘れてはならない。

## 広島市教育センター研修事業について

教育センターでは、広島市の学校教育及び社会教育関係職員を対象に研修事業を実施し、教育関係職員としての自覚を深めるとともに、専門的資質能力を高めることによって本市教育の向上に資するという目的達成に向かって鋭意努力を続けております。

昭和55年度における研修事業の方針・内容・運営・実施並びに講座の一覧については、すでにこの『所報』第4号に紹介したとおりですが、これらの研修事業は、次のような基本的な考え方に立って実施しております。

- 教育関係職員として必要な基本的・専門的事項や内容について研修を行う
- 教育の質的改善充実を図るため、各種の教育分野や領域についての研修を行う
- 当面する教育課題解明をめざしての教育内容や方法についての研修を行う
- 多様な研修形態を取り入れて、参加者の意欲的で積極的な研修に努める
- 研修事業は、「研修講座」と、参加者が実践的研究主題を設定し、年間にわたって継続的に研究に取り組む「研究講座」の二つに区分して行う

については、今年度、これまでに実施してきた講座の中から、その2、3を紹介します。まず、新採用教員を対象とする講座は、夏季休業中に、学級経営講座・学習指導講座を、それぞれ3日間ずつ、小学校と中・高等学校との校種別に行いました。真剣かつ若さあふれるものでした。次に11月に実施した教養講座は、東京からNHK解説委員（教育担当）小尾圭之介先生を招き、“80年代の教育”と題した講演をいただきました。子供の側からの発想に基づく教育への転換を説かれ、われわれの視野を大きくひろげるものでした。また、小学校教員を対象とする夏季の実験実技講座は、いずれも盛会で教科によっては400名を数えるものもありました。

ところで、これまで実施してきた2カ年の校種別講座数と、講座区分別校種別参加者数をまとめると、表1、表2のようになります。参加者数についてみますと、夏季に実施する教育研修講座や実験実技講座への参加が多く、平日に年間5回にわたって継続的に行う研究講座への参加は少ないという傾向があり、また、参加者数は校種によっても大きな開きがみられます。

今後とも、教育関係職員の教育実践に役立つ研修をめざして、質的充実に努めてまいります。教育センターの研修事業に対し、一層のご理解ご協力を賜りますようお願いいたします。

表1 校種別講座数

年度 校種	昭和 54年度	昭和 55年度
小	27	36
中	30	39
高	20	26
幼	10	13
社教	10	13
合計	97	127

表2 講座区分別校種別参加者数

年度 講座区分	昭和54年度							昭和55年度					
	小	中	高	幼	社教	計	小	中	高	幼	社教	計	
教育 研修講座	1,529	170	14	34	147	1,894	1,915	616	42	169	95	2,837	
実験実技等 研修講座	2,368	312	—	—	—	2,680	3,242	549	—	250	—	4,041	
教育機器 技法講座	186	42	22	—	—	250	160	27	3	25	15	230	
管理職 研修講座	81	71	6	12	—	170	745	243	50	48	—	1,086	
教育 研究講座	391	166	25	249	132	963	495	215	10	74	42	836	
合計	4,555	761	67	295	279	5,957	6,557	1,650	105	566	152	9,030	

(注) 55年度の参加者数は、12月末現在のものを示す。